

「地域包括ケアシステム」とは、高齢者のシステム、介護保険の話であり、障がい者・児のお話ではないと理解されているが、編集委員会としては障がい者・児も含む概念と位置づけ「小児」に注目して今回の特集を企画した。小児における理学療法は理学療法の原点の1つであり、広域を対象とした地域リハビリテーションと市町村を対象とした地域包括ケアシステムの理念はこの理学療法を実施するうえで必要不可欠である。「小児版地域包括ケアシステム」を整理するには十分とは言えないが、その端緒となる有益な臨床実践の知識を紹介する。

■小児における地域包括ケアシステムと理学療法（橋爪紀子，他論文）

地域で生活する障害児を支える仕組みを、後期高齢者の「地域包括ケアシステム」と比較しつつ解説する。障害児支援体系の歴史的経緯、一例として横浜市の障害児ケアシステムについても紹介する。理学療法士はケアシステム内のさまざまな場で、早期介入から始まり長期にわたってかかわる機会が多い。当事者と家族への支援だけでなく、ケアシステムに関わる多職種が連携していくうえでの役割も重要である。

■小児整形外科病棟における理学療法と退院支援（井上和広，他論文）

近年、脳性麻痺リハビリテーションガイドラインをはじめとして、小児整形外科的治療や理学療法に対するEBMが示されているが、治療方針や内容等は各施設や地域により異なる現状にある。本稿では、北海道立子ども総合医療・療育センター小児整形外科病棟における、主に脳性麻痺や骨系統疾患に対する整形外科的手術や理学療法、また退院時の支援内容や退院後の地域連携について、北海道における実践を例に挙げ述べる。

■小児の内部障害に対する理学療法と退院支援（横山美佐子論文）

内部障害を持つ子供（以下、内部障害児）の場合、内部障害が良くなれば身体運動や活動は問題ないと認識されていることが多い。しかし、活動や参加に制限を来す症例を経験するが、その実態は不明である。そのため、地域では内部障害児の理学療法の必要性は理解されていない。内部障害児の人生を支える医療・教育・福祉を確立するために理学療法士としての役割を意識する必要がある。

■小児がん病棟における理学療法と退院支援（岡山太郎論文）

小児がんの治療の根幹は、過不足のない適切ながん治療と、患児家族に対する包括的なケアである。小児がん児に対する理学療法は、身体活動量の維持改善と、機能障害への対応が主な目的だが、退院や復学支援、患児家族に対する心理支持の役割も担っている。その時々に応じた適切な理学療法を行うためには、対象者の年齢、がんの種類、治療内容と副作用、機能予後（時には生命予後）の理解が重要となる。本稿では、小児がん治療の特徴、小児がん児に対する理学療法、退院および復学支援などについて論じてみたい。

■通所系小児理学療法と社会参加支援（高橋一史論文）

地域で在宅生活を送る障害児を支えるうえで通所・通院小児理学療法が果たす役割は大きい。通所・通院小児理学療法に携わる理学療法士には実生活に即した「生活モデル」の理学療法を実践することが求められる。そのためには、地域療育関係者と密に連携・協働を図ることが重要となる。本稿では、筆者が勤務する茨城県の取り組みを中心に紹介し、地域の療育機関と具体的にどのように連携・協働を図っていくべきか述べる。

■訪問系小児理学療法と社会参加支援—18歳を過ぎてからの動向—スマイル訪問看護ステーション利用者から（直井寿徳論文）

特別支援学校を卒業した子供たちの多くは社会福祉施設を利用する。その生活は学生時代と比べると体力的、時間的な余裕があり変化の少ない安定したペースとなる。そしてその生活は「その子とその家族」の当たり前のものとなる。この生活を自信をもって続けられるためのサポートを、生活に入り込んでいく訪問という立場から考えていく。